昭和一六年・文学者が書く蘭印

――高見順『蘭印の印象』・『諸民族』

松本和也

Ⅰ

昭和一五年一二月、長女・由起子を病気で失った高見順は、翌昭和一六年、公私ともに激動の一年を迎える。年譜「一九四一年（昭和十六年）三十四歳」の項には、次の記述がみられる。

一月、三雲祥之助とジャワおよびバリ島に発つ。当時、外務省にいた異母兄、坂本瑞男の尽力があったという。五月中旬、帰国。旅のはじめより日記を書きつづける。「文学非力説」を発表し、物議をかもす。この年の秋、はじめての書き下し『ある晴れた日に』を書く。創作用ノートの余白にひそかに詩を書く（「三十五歳の詩人」）。徴用令により陸軍報道班員としてビルマ派遣軍に配属され、十二月八日、香港沖の洋上で太平洋戦争の勃発を知らされる。[1]

本稿の問題関心から特に注目したいのは、文学者の南方体験である。しかも、高見は太平洋戦争開戦をまたいで南方に二度渡り、蘭領東印度（以下、蘭印）・ビルマ双方について多くの文章を書いた。それゆえ、高見の文学者としての言動は、それに対する反応も含め、太平洋戦争前後における文学者のあり方や南方認識―表象に関わって重要な意義を担うこととなった。

昭和一六年の蘭印行の旅程は、次に引く高見順「あとがき」（『蘭印の印象』改造社、昭16）に整理されている。

昭和十六年一月二十七日　ジョホール丸にて神戸発。／二月四日　パラオ寄港。八日　セレベス・メナド寄港。十一日　マカッサル寄港。／二月十三日　ジャバ・スラバヤ着。上陸。三月五日まで、スラバヤに滞在。／三月六日　スラバヤ発、汽車にてバンニヨワンギへ、バンニヨワンギより連絡船にてバリー島へ渡る。三月三十日までバリー島に滞留。／三月三十一日　スラバヤに帰る。四月四日まで滞在。／四月五日　汽車にてバタビヤに行く。／四月九日　バンドン行。十日　ガロー行。十一日　チエリボン行。十二日　ジョクジヤ行。／四月十三日　ソロ行。十四日　スラバヤに帰る。／四月十五日　スマラン丸に乗船。／四月十七日　マカッサル寄港。二十一日　北ボルネオ・サンダカン寄港。二十九日　厦門寄

港。／四月三十日　台湾高雄寄港。上陸。五月二日　基隆にて再び乗船。／五月六日　神戸入港。（308～309頁）

この蘭印行に関わる先行研究においては、そもそも、なぜこの時期に蘭印なのか、当時大きな議論を呼んだ高見「文学非力説」（『新潮』昭16・7）に端を発する文学非力説論争、蘭印体験をモチーフとした初の書き下ろし『ある晴れた日に』（河出書房、昭16）などの諸問題が検討されてきた。[2] 他方、蘭印旅行中から帰国後間もない時期に矢継ぎ早に発表された報告文学（ルポルタージュ）や短編小説については、これまでほとんど検討されてこなかった。

そこで本稿では、現地報告『蘭印の印象』（改造社、昭16）と短編集『諸民族』（新潮社、昭17）を検討対象として、それらの表現－受容について、同時代の視座から分析－考察を行う。

Ⅱ

先行研究で、《高見が蘭印へ行っていたのは、昭和一六年一月下旬から五月初旬までだが、蘭印と日本の間で緊張が高まっていた、まさに「一触即発」の形勢にあった時期》[3] だと指摘された通り、板垣與一・平貞蔵・山田文雄「南方圏の現実」（『改造〔時局版19〕』昭16・6）を参照すれば、板垣に《蘭印に船が段々近づいて行つて、何よりも先づ旅行者にハツキリ映じて来るものは、蘭印が今戦時状態に在る――といふこと》（281頁）だという発言がある。日本の南進論については、後藤乾一に次の指摘がある。

南方は豊かだが未開拓であり、かつ欧米列強の支配下に呻吟しているという現状認識と、その地域を開発し、かつ彼らを救済することこそ盟主日本の使命である、という責任負担論は、一九三〇年代から四〇年代前半の日本の南方観の一大特徴であることはいうまでもない。それは約言するならば、「アジア主義」的盟主論と「資源開発」論の独善的結合であるといえよう。[4]

こうした概括を裏づける言表は、容易に見出せる。一例として無署名「蘭印点描」（『警防』昭16・6）を、次に引いておく。

資源的に言つても、蘭印が世界の宝庫であることは言はずもがな、数字を挙げて列べるまでもないが、あの小国和蘭を欧洲の富国にさせた台所であり、その資源ゆへに英米が日本の南進を拒否せんとしてゐるわけで、重要資源たる石油、石炭、金、銅、錫、木材、米、棉、護謨等より、その他生活必需品を数へるならば世界に無いものがあるといふ種類に於いても豊富であり、水産に至つても四面環海、我々の好物である鮪、鰹等も近頃では日本近海より南方海面こそ有望となつてゐるところである。ダイヤモンドすら蘭印からは採れるほどだ。栽培方面をみても、米作は年二三回穫れるし、胡椒タピオカ、砂糖椰子、パインアツプルバナヽ、茶或は筍の如き蕨が一年に六回もとれる。その地味の肥えた点は熱帯地特有の肥料無しで年何回となく作物を育てる。近時は邦人の農園で柑橘類も栽培されてゐる。（68頁）

こうした蘭印をめぐって展開される外交交渉については、和田敏明「蘭印交渉の前途」（『改造』昭15・12）が日本の立場を示している。蘭印交渉を《高度工業国としてのわが国と天然資源豊かな蘭印との有無相通、共存共栄の関係を規整する通商交渉》だと

位置づける和田は、それを《世界政治的観点からみれば、大東亜共栄圏の名で呼ばれる地域的協同体制建設の第一歩》と捉えては《政治的意義》（46頁）を強調し、次の主張を展開していく。

蘭印地方は由来、濠亜の地中海とも、東亜のバルカンともいはれ、列強の利害関係が錯綜するところである。太平洋戦争の発火点は正にこの地方といふべきであらう。蘭印当局が徒らに英米の支援を頼んで、わが大東亜建設の民族的使命の達成を妨碍するの態度が、如何なる結果を招来すべきやを再省すべきであらう。（51頁）

また、《南方諸民族は彼等の支配者である仏蘭英勢力の喪失を契機として白人帝国主義の桎梏より離脱しアジヤ人としての本然の自由を恢復せむとして凡ゆる困難と戦ひつゝ真の独立獲得の闘争を展開してゐる》と指摘する「支那及び南方民族の解放」（『現地報告』昭16・5）の稲嶺光南は、《アジヤの解放を念願とする日本がアジヤの同胞たる彼等の苦吟を諒察し身を以つてこれが解法に邁進するならば南方一億の大衆は欣然として日本と協力して相共に東亜共栄圏の建設に挺身活躍するであらう》（30～31頁）と言表しており、共栄圏イデオロギーも提示されていく。

以上をふまえ、本節では高見順『蘭印の印象』（改造社、昭16）を検討する。『蘭印の印象』は、蘭印旅行を振り返った「蘭印の印象」を冒頭に、その体験から日本文化・文学のあり方を考察した「蘭印から帰つて」（一、文化の儚さ／二、文学非力説）を結末に配置し、その間に印象記や日記など（蘭印点描（一）／蘭印点描（二）／土民の女／旅日記）を嵌入した構成を採る。また、書物の装幀・挿絵二〇点は、同行した画家の三雲祥之助による。

ここでは、同書のエッセンスと目される「蘭印の印象」（初出『改造』昭16・6）を検討していく。同文では、冒頭から次のように「南洋の土人」・「土民」の表象が問題化されていく。

南洋の土人といふと、蘭印へ行く前には、真黒な野蛮な土人が椰子の下で裸かではだしで踊りでも踊つてゐるやうに愚かしくも想像してゐたものだが、いま帰りの船のなかで、和蘭治下のインドネシア土民の姿を思ひ浮べてみるのに、一番強く鮮やかに来るのは、ジョンゴスとしての土民の姿である。Djongos――馬来語で、ボーイ、下男のことである。これが、何か蘭印土民の代表的な象徴的な姿のやうにさへ思へるのである。（高見テクストの引用は初出による、以下同／178頁）

「じツとしてゐても汗がジリジリ出てくる暑さのなかで、ジョンゴスは詰襟の洋服を着てゐる」と書く高見は、「おしきせを着ることを、土民は好んでゐるところもある」という観察を示し、その理由として「私たち」（日本人）の考えとは異なり、「ボーイといふのは土民にとつてさう悪くはない職業」であり、「高級とは言へなくても決して下級ではない職業」であることをあげる。さらに高見は、「和蘭人は、一体に西洋人は、その使用人におしきせを着せることを大変に好んでゐる」、「小なりといへども、そんなところでも己れの勢威を示したい、そして一種の権勢欲を満足させたいといふ気持」（178～179頁）なのだとみる。ここで高見が示した認識は、日本人の立場から、和蘭人（西洋人）に支配されている土民のあり方を、つまりは支配－被支配関係を含みこんだ縮図として、「ジョンゴスとしての土民」を象徴だと位置づけているのだ。そうした「土民」（の態度）にふれて、「軽蔑したく

ない」、「悲しく肚立たしく、なんともやりきれない」（179頁）と感じた高見は、次のような義憤に駆られていく。

「ジョンゴス！」／と呼ぶと、例の詰襟にはだしのジョンゴスが、「サヤ・トアン」と慇懃に答へて、はだしだから足音もなく猫のやうに静かにやつてくる。褐色の顔は無表情だが、卑屈なものが全身に漂つてゐる。色こそ少し黒いが、日本人とよく似た顔や身体つきをしてゐる。この日本人とよく似たインドネシア人を、誰が、このやうな憐れな恥づべき卑屈さに落したのであらう。なんとも堪らない気持だつた。〔略〕同じ人類が、人類をこのやうな卑屈な人間に人為的に変へて了ふとは――人類への許しがたい罪悪。（180頁）

ただし、高見がジョンゴスを「猫」に喩え、顔の「色」に注目していたこと、また、「インドネシア人」についても日本人との類似性や、言外には同じ東洋人であるゆえに同情をよせている点は見逃せない。（時代的な限界もあるが）この程度には問題含みな高見の筆は、「白人の支配者が現れる前は、土民はもつと卑屈に生きねばならなかつた、と白人は言ふ」、「同じ民族の支配者の圧政から、むしろ救つたのだと和蘭人は言ふ」という声を認めつつ、「支配者の暴政」の「名残りをそのまゝにしておく狡さ、これはどうなるのだ」（180～181頁）と、苛立ちを隠すことはない。

ここで高見は、これまで書いてきた「この文章」について「一種のヒステリー気味」だと自己言及し、次の記述を差し挟む。

〔日本から〕出てくる前に読んだ範囲では、実のところ、蘭印に関するものにはいづれも何かヒステリー気味が感じられ、私はそこで私だけはひとつ「冷静」に見て「冷静」な印象記でも書かうと思つたものだつた。ところが、いざとなると……。／ヒステリーといふ言葉が悪いので、ほんとうのことを書かうとすると、やはりかうした調子になるのが当然なのかもしれない。（182頁）

そうであれば、ここまで蘭印の「土民」について書いた自身の文章について、高見は「ほんとうのことを書かう」としていたがゆえに「ヒステリー気味」だったことを認めると同時に、そのようなものとして同文を読むことを読者に要請していくだろう。

その上で高見は、和蘭（の支配体制）についても論及していく。

第一に、交通規則の本が「多くは絵で示してある」事例に関し、まずは「土民」が「殆んどは字が読めない」ことをふまえた「親心」、「親切」だと評した後に、「ほんとうの親切」とは「土民の無知蒙昧をそのまゝ「尊重」して、字の読めないやうな無教育状態にいつまでも突き落しておくことより、字の読めるやうな文化的な高さに土民の一般を高めることの方にある」と考え直す。さらに、「和蘭の植民政策の成功は、一にこの「親心」に拠つてゐるやうである」（191頁）として、高見はオランダの「植民政策」を、望ましくない「親切」によるものとして批判していく。

同様の認識・指摘は、大宅由耿・小島精一・齋藤文也・下田文一・永田安吉・西原龍夫・牧悦三・宮原武雄「「南進国策の新展開」座談会」（『文芸春秋』昭15・8）における、齋藤の《私達は〔蘭印を〕オランダの植民地とは思つて居らない、オランダ人の搾取場であると考へて居る》、《土人の如きに対しては、昔の習慣通り着物を着るな、跣足で歩け、さうしてちつとも教育を与へず、靴も穿かせない》（150頁）という発言にもみてとれる。また、平

野義太郎も「蘭印セレベス島」（『改造』昭16・8）で、《蘭印統治の対象は、人口の九割以上を形成する住民が単純原始的な熱帯土民》だとした上で、次のように言表している。

「オランダ東印度会社」は首狩りや奴隷のコマ切りこそ残忍だとしたけれど、自らのその商業に関するかぎりは、最大の利益を搾取し、蘭印諸島の莫大な富を、その株主ともいふべき土民に与へず、土民の生活程度を引上げることもなくオランダの官吏・商人が財嚢を肥す以外の何ものでもなかつた。（217頁）

してみれば、「蘭印の印象」にみられる高見の「土人」認識―表象や和蘭の支配体制批判は、同時代言説にごく近似している。

さらに、高見はオランダのあり方についても兵隊の行進風景に即して論及していく。先頭の喇叭隊につづく「兵隊さん」について、「上官は大概背のヒヨロ高い和蘭人（土民の士官もあるが）、そしてそのあとの兵士たちは背の低い土民兵、なかにまた和蘭人、混血人などの兵士の、頭がピヨコンと飛び出てゐるのも混つてゐて、そのデコボコは、なんともはや珍無類の風景」だと捉える高見は、「その珍妙さ」について次のように考察する。

和蘭人は去年の五月十日に母国を失つて、政府は英国に宿がりの有様。それを思ふと気の毒で、神経過敏も実際無理からぬことと同情される。珍妙な兵隊も、――その珍妙さは、外見ばかりのことでなく、その内容と質のそれでもあるにちがひないが、その珍妙さで蘭印を守らねばならぬのかと思ふと、可笑しいといふより気の毒である。（194頁）

ここで高見が和蘭人の「神経過敏」に示した「同情」は、どこか蘭印について書く高見が自覚した「ヒステリー」に通じる。

『蘭印の印象』に関わっては、「蘭印の印象」（『改造』昭16・6）に対する二つの同時代評が確認できた。その一つは、次に引く無署名「改造」（『三田文学』昭16・7）である。

それは文字通り印象記で、ルポルタージュにまで高まつてはゐない。だが、その観方は、やはり、作家らしく、蘭印のオランダ人達の美しい家と庭を羨んで、日本では家庭での楽しみが余りないが、それは家や庭が貧弱だからだとしてゐるのは当つてゐなくはない。ヒステリツクなまでに、高見順は此処でオランダの遣り方を非難してゐるのだが、尤もなこと乍ら、論旨が浮き上つて了つてゐるのは、底に一貫した観念の基礎がないためであらう。高見順も変つたものだといふ感じばかりがした。（112頁）

ここで評者は、「蘭印の印象」を作家らしい《印象記》と捉えた上で、オランダの植民政策に対する高見の批判を妥当だと認めつつも、《観念の基礎》の欠如ゆえに発言と主体に間隙を感じとり、ともすると時局便乗に近しいものと捉えている。もう一つの同時代評、除村吉太郎「作家の自己溺愛――素人の小説観――（上）」（『読売新聞』昭16・7・26夕）では、《私が読んだもののうちで割合に面白かつたのが高見順氏の南洋紀行（私はそれを自己流に解釈しながら読んだのであるが）であつたといふ事実は、最近の本学小説の無力の一つの証左になる》（3面）と、同時代小説に比した「蘭印の印象」の《面白》さが高く評価された。

ここで、次に引く高見順『蘭印の印象』刊行時の宣伝文、無署名「出版だより」（『文芸』昭16・9）も参照しておきたい。

問題のジヤバ、スマトラ、忙しき風俗の島・バリーと、蘭印を隈なく遍歴して新帰朝せる著者の紀行文集。ジイドの「コンゴ紀行」を凌駕せんものと気負ふこの花形作家の、縦深なる洞察眼と、自在なる話術、得意の才筆が旺溢する楽しき書である。加ふるに同行の三雲祥之助画伯の挿画、挿絵を以てなれる絶対美本。御期待を乞ふ。(175頁)

また、広告「高見順著　蘭印の印象」(『文芸』昭16・11)には、次の紹介文が読まれる。

本書は抗日包囲ＡＢＣＤＳラインの一環――問題の蘭印を隈なく視察して帰来せる著者の最新現地報告である。然し茲にはどの一頁の隅々にも「作家の眼」がピカピカと光つてゐることに気付かれやう。ジイドの「コンゴ紀行」を凌駕せんものと気負ふこの花形作家のこの南方通信は、縦深なる洞察眼と、自在なる才筆、得意の話術とを以て、心楽しく読者を捕へてしまふことであらう。(頁表記なし・裏表紙見返し)

いずれも、高見の文学者としての《眼》－《才筆》を前景化しながら、『蘭印の印象』をアンドレ・ジッド『コンゴ紀行』(原著＝*Travels in the Cong*, 1927／邦訳＝河盛好蔵訳『コンゴ紀行』岩波書店、昭13)に擬している。フランス領赤道アフリカ地方を旅行した時の日記である同書は、ジッドが白人の原住民支配を告発したもので、ここに『蘭印の印象』の位置づけも明らかである。さらに、次に引く太平洋戦争開戦後の広告「高見順著　蘭印の印象」(『文芸』昭17・1)では、新たな意義が見出されていく。

本書は文学者の観た抗日蘭印の現地報告である。群少のルポルタージュ的文学とは異り、茲にはどの一頁の隅々にも作家の眼がピカピカと光つてゐる。その縦深なる洞察眼と自在なる才筆は、蘭印の全貌を捉へて余蘊がない。(84頁)

結果的にせよ、『蘭印の印象』で扱った蘭印の戦略的な意義が増したことに連動して、時局の追い風をうけるようにして、同書は文化工作としての意義をも担い、価値づけられていった。

Ⅲ

本節では、日記・旅行記、報告文学(ルポルタージュ)、エッセイに少し遅れて断続的に発表され、高見順『諸民族』(新潮社、昭17)に収録された短編九つを対象として、内容とその受容について検討する。

高見順「バリーの犬」(『日本評論』昭16・7)は、語り手兼主人公の「私」が日本からバリー島に旅立ち、帰国するまでの出来事を、犬をめぐるエピソードによって串刺しにした小説である。「犬が大嫌ひ」(308頁)な「私」は、妻が子供の遊び相手にもらってきた仔犬に苦労していた。ところが、突然子供が死んでしまい、犬の処遇を妻に託したまま、「私」は「珍奇な島として世界的に有名」なバリー島へと旅立つ。そのバリー島には「犬がべら棒に多」く、「昼夜のけじめなく」(310頁)犬に吠えられて困惑した「私」は、「バリー島にもう永く住んでゐるＳさん」(311頁)から、それが豚の番と悪魔を防ぐためであることを聞く。「私」は、言葉の不自由を感じつつもバリーの風物や人事を目にしては、踊り子キニンに惹かれたり、星空を見ては「日本から遙か離れた異郷にゐるのだ」と、「鮮かにそして痛烈に感じ」(324頁)たりしている。一連のバリー島体験のクライマックスとして、「ジヤンゲル

の踊り」（325頁）の場面が書かれる。舞踊劇を楽しむ間に余所見をした「私」は、「ふと見ると、一疋の大きな犬がノソノソと「舞台」のなかを歩いてゐる」（326頁）ことに気づく――「犬はまるで新しい出演者でもあるかのやうに、ゆつくりと一応舞台を一巡して、そしてその手持無沙汰のやうな恰好で、真中近くのところにでんと腰をおろした」（327頁）。その後、「アルジユノが（人間の方が！）その犬をよけて、巧みに踊りの辻褄を合はせて（そんな言ひ方があるかどうか知らないが）踊りつゞけて行く」光景を目にした「私」は、「イヤ、これには驚いた」、「人間の方が遠慮して犬をよけようとは！」と「ひどい衝撃」をうけ、「明かに狼狽」する。「私」は、「人間の立場から専断的に見てゐるからだ」ということを「先づもつて大至急に反省」（328頁）する。

この出来事を「私」は、次のような問題へと架橋していく。

私にはバリー人が、／「だつてさうぢやないか。人間がこの地上に生きてゆく権利と、犬がこの地上に生きてゆく権利とは、神の眼からすれば同じものではないだらうか」／さう言つてゐるやうに思はれた。

こうした思考は、次のようにして現実へも流用（アプロプリエイト）されていく。

バリー人は、たとへばジヤバ人の持つてゐるやうないかにも被征服民族らしい卑屈な翳といつたものを少しも持つてゐなかつた。ジヤバ人は固より蘭印の多くの土民は、統治者の白人を自分たちの及びもつかぬ優秀で崇高な人間のやうに思つてゐる、思はせられてゐる。ところがバリー人だけは、自分たちも白人も民族的に優劣は無いといふはつきりした誇りを持つてゐるといふ。――[5]（329頁）

このように考える「私」が、蘭印体験を通してバリー人／ジャバ人／欧州人（和蘭人）／日本人といった民族の関係性について、何かしら示唆を得たことは間違いない。「足掛け五ケ月振り」（329頁）で内地に戻った「私」は、自宅の飼犬に「太郎、吠えていいぞ。卑屈ぢやいかんぞ」（330頁）という声援を送るのだから。

「バリーの犬」と同月発表の「諸民族」（『改造』昭16・7）もバリー島が舞台で、多様な民族とその差異が主題とされる。「支那人の宿屋」で「私」と同行のMさんは、「明日（あした）のバスの切符」（44～45頁）を二等にするよう同宿の支那人から強く勧められる。翌朝、車中で「私」は、「このバスにもいろんな民族が乗り合はせてゐる訳だな」（51頁）という感慨にふける――ジャバ人、混血人、欧州人、支那人、印度人といった具合である。そのうちに、「隣りのジヤバ人が〔略〕股をひどくひろげて坐つてゐる」がゆえに、「私」は「席の窮屈さが苦になり出」（52頁）す。

するうち私は腹が立つてきた。疲れると、腹立ちつぽく成るものだ。／（なんだ、偉さうに股を開いて、――こつちは窮屈で困つてゐるのだ。もう少し遠慮したらどんなものか。）／腹立ちを言葉にすると、さうなる。それが軈て、かうなつてきた。／（なんだ、この土人め、土人の癖して偉さうに股を開いて、――土人らしく、日本人に対しては、もう少し遠慮したらどんなものか！）

口にこそ出さないものの、こうした強い感情を抱いた後に、しかし「私」は次のような自己分析を展開していくだろう。

私は、そして、ジヤバにゐた時分は、さうした土民の卑屈さに対して逆に腹を立ててゐた。はじめは憐憫の気持だつたが、

そのうち、もう少ししやんとしたらどうかと腹立ちに変つて行つた。土民をそんな風にさせてゐる白人への腹立ちと同時に、白人にそんな風にさせられてゐる土民への腹立ちも強かつたのである。それが、――なんといふ矛盾だらう。しやんとしてゐる土人を見て今は、卑屈でないと言つて私は腹を立ててゐるのだ。[6]（53頁）

その後、自分が「支那人」と「間違へられてゐるかもしれないといふだけ」で「慥かに不快だ」（54頁）と感じた「私」は、「支那人と間違へられて不快を感じるといふのは、これはどういふのかと、ちよつと考へさせられた」。さらに、昨夜の切符を二等席にすべきだという助言が「秘かに侮辱を与へる魂胆」（55頁）だったのではないかと疑っては、「私」は自己嫌悪に陥っていく。

バスは途中の部落で停車し、「「欧洲人」だけ」が名前や行き先をチェックされたが、その際「私」は、「（さて、隣りの土民君。僕はかくの通り支那人ぢやないんだぜ。）」、「（よく見ておき給へ。僕は日本人だぜ。――ざまア見やがれ！）」といった気持ちを抱き、「次の瞬間」には「自分の浅間しさにぞツ」とする。「日本人であること」を「ほんたうに誇りにしてゐる」という「私」だが、「だからと言つて、支那人を軽蔑したり土人を侮蔑したりすること」を「ひどく浅間しく思」い、「そんな自分の感情にぞツとしたのだ」（56頁）として、次のようにつづける。

浅間しいといふより、それはいけないことだ。絶対いかん。何故なら、日本はいま支那と戦争はしてゐるが、それは東洋の大きな平和のための、そして日支提携のための戦ひだ。提携しなくてはならない相手を軽蔑していいだらうか。／そして又私はジヤバの土民も軽蔑したくなかつた。ジャバの卑屈な土民を見て、――私たちと同じやうな顔をしながら、その卑屈さはなんといふことだと、私はどんなに遣り切れない気持にさせられたことか。私は和蘭人と一緒に成つて、土民を低劣な人種と軽蔑したくなかつた。……（56～57頁）

ここで「私」は、実感とは重ならない日中戦争のイデオロギーを優先することで、自らを倫理的に戒めようとしていく。また、自分の実感に即した振る舞いが、和蘭人のジャバ人に対する人種差別的態度に近似してしまうことも、「私」は避けようとしている。こうした「私」の葛藤は、帰途ジャバに渡って後、欧州人の通過がチェックされる際に見逃されたことによって解消される。「私」はあえて日本人だと「申し出」ずに「自分からの支那人と間違へさせ」ることで「罪滅し」（58頁）をしようとする。

以下、「バリーの犬」、「諸民族」の同時代受容を検討していく。

矢崎弾は「創作月評　六月」（『帝国大学新聞』昭16・6・23）で、井上友一郎「青丹よし」を《現代社会人の、特にインテリの一性格を鋭く特質的に描破してゐる》と評した延長線上で「諸民族」に論及する。矢崎は《一日本人の、心理の起伏は、国民的、民族的見地から描かれてゐながら、今日の社会的個人の警告を切実に伝へてゐる》、《個人の社会性とは国民性であるといふ事に思ひ到ればよい》（8面）と評し、「諸民族」に書かれた日本人の民族的アイデンティティを評価する。他方、「バリーの犬」に論及する三四郎「大波小波　非力な高見の作」（『都新聞』昭16・6・29）は《文学の非力を叫ぶ氏に相応しい非力な出来ばえ》、《蘭印まで行つて何を見て来たかと言ひたい》（1面）と、蘭印という

モチーフに文学者の筆力が追いついていない点を難じた[7]。両作を同時に論じた新聞評としては、次に引く坦懐「七月号小説評　高見順の二作」（『日本学芸新聞』昭16・7・10）がある。

高見順の「諸民族」は『日本評論』の「バリーの犬」の弟である。唯少しばかり紀行風と小説風との書き方のけじめが示された感である。「諸民族」ではバリー島からの帰途バスに乗り合したジヤバ人、混血人、支那人、白人、印度人などのなかで『私は、これでこのバスにもいろんな民族が乗り合せて居る訳だなと、ふとそんなことを思つた。』と言ふ訳である。その帰途の有様を得意の言ひ廻しで殺して居る。これは紀行文風である。／『日本評論』の「バリーの犬」は自家の犬かの事から及んだ連想で、バリーの犬を引き合ひに出し、その島の踊の様を紹介し、行きずりの土民の娘への淡い情など写してから、自家の犬へ戻ると言つた小説風である。けれどこれでは犬に関しては「自家の犬」かバリーの犬かけじめが着かない。唯「バリーの犬」の方が人目を引くには便利であらう。（6面）

ここで評者は、蘭印旅行に基づくモチーフを確認しながらも否定的な評価を示している。《紀行風／小説風》という観点から両者を分節し、「諸民族」は《紀行風》から《小説風》へ脱皮しつつある状態、「バリーの犬」は《小説風》、したがって《人目を引く》点も含めて後者の方が優れているという評価である。両作品に論及した同時代評として、石田英二郎「七月の小説」（『新潮』昭16・8）がある。石田は「バリーの犬」から、《バリーの人たちと犬との不思議な、奇妙な取合せに驚きあきれかへる》と異国趣味を読みとった上で、次のように論評する。

南洋土産の作品。そのスタイルは相変らず融通無碍で、書きながしてゐるやうにみえるが、それが、この作者の小説の持味である。犬と人間。圧迫されて生き存へてゐる白人階級と、一日本人としての作者の世界観とでもいふべきものが随所にみえてゐる。そして、作者の思考するありかたがうかがはれる。（87頁）

ここで石田は《作者の世界観》を読みとりつつ、それに対する評価は留保している。「諸民族」については、次の論評がある。

バリー島の支那人の宿屋に泊つてゐた私がいよいよバリー島を去る日の乗合自動車での見聞を中心に、ジヤバ土人、印度人、支那人、和蘭人のそれぞれの民族のもつてゐる人間性とか、その人間性の上に立脚しての相互の民族のあひだに蟠る侮蔑感とか、その侮蔑感についての矛盾や相剋をかいてゐる。しかし、さういふ矛盾や相剋の見方が概念的でないにもかかはらず、作者の本音の本音といふまでにはいたつてゐないことをかんじさせられる。（88頁）

モチーフの問題性をよく読みとった石田だが、《作者の本音の本音》に至っていない点に不満を表明し、それゆえ同作を《旅行記》だと位置づけている。こうしてみれば、石田の評価軸は明らかで、新奇に映じるモチーフを書くだけでは《旅行記》にとどまり、それについて文学者が主観を通して十分に理解を深めた後に書いたものだけを小説と呼ぶべきだ、ということになる。こうした評価の枠組みは、日中戦争開戦後に簇生した報告文学（ルポルタージュ）以来のもの[8]だが、戦局が深刻になるにつれて、可視化されない作家の主観

に求められる抽象的な水準は、高まっていった。

こうした評価軸に即した河上徹太郎「小説の中の「私」」（『文芸春秋』昭16・8）は、高見に高い水準を求めた同時代評である。《同君の他の文業に関心を持つ私も、此の印象記には関心出来なかつた》という河上は、《同地の民族間に自づと形づくられてゐる階級意識に絡んで、優越感や卑屈感が個人的な対人意識の場で描いてある》と「諸民族」のモチーフをまとめ、《読んでどこまで同君の穿鑿ぬきの独り角力だか分らない所があり、しかもさういふことが愛嬌にならないで、明かに気の廻し過ぎと思はれる節が多くて、不愉快》（275頁）だと酷評し、次のようにつづける。

一国の生活文化について的確不動の発見をなすためには、少く共、自身的確不動の一生活文化感情ともいふべきものを確保してゐる必要がある。殊に欧洲一流文人の外国見聞記が鮮かなのは、自国の生活感情に通達した識見を持つてゐる上に、互に同質水準で且つ交流の激しい隣国との微妙な発達によつて感覚が磨かれてゐるから、感受性が根が坐り、鋭いのである。〔略〕私は何も高見君の識見を疑ふのではないが、然し殊更その伝で同じ感覚の働き方を南方の植民地に働かしても、得るものは異国趣味か、全然個人的な神経の遊びしか得られない筈だ。（275～276頁）

河上が《欧洲一流文人》を引きあいにだして高見を難じる図は、「諸民族」のモチーフからすれば皮肉なことではあるが、この批判は高見個人というより、日本の文学者一般、さらには近代日本に対する批評としての射程をもつ。高見の「バリーの犬」、「諸民族」はこうした問題を内地の文学場に投げかけたことになる。

以下、そのほかの『諸民族』所収短編について確認していく。

「雛段」（『新女苑』昭16・11）は、「たつた一人の子供」（86頁）である由紀子を失った直後に旅に出た「私」が、ジャバのMalangで「美しい雛段」（88頁）を目にし、また、バリー島の日本人小学校では「凜々しく溌剌とした日本語」（92頁）を耳にし、由紀子のことを改めて思い出す随筆風の作品である。

「ププタン悲史」（『サンデー毎日〔秋期特別号〕』昭16・10）では、「バリー人は、ジヤバ人なんかと大分違ふやうですね」（137頁）という認識を抱く「私」に向けて、「バリー人はもともと伝統的に、立派な民族」である所以を、「ほんの数人しかゐないバリー島在住の日本人」であるKさんが「バリーが和蘭領に併呑された時の悲劇」（138頁）を語っていく。全一〇章構成のエピローグ「十」でKさんは、「熱の籠つた声」で次のように語る。

〔略〕もしこの自分が日本人でなく、バリー人だつたらどうか、といふことです。バリー人、つまり白人に征服され支配されてゐるバリー人。その国を白人に掠奪され白人の植民地にされてゐるバリー人。――私はゾツとしました。バリー人でなくてよかつた。さう思ふと同時に、私は日本に生れてよかつた、日本人であつてよかつたとしみじみとさう思つた。日本に生れた仕合はせさ、日本人であることの有難さが胸に犇々と来ました」

さらに、Kさんは「日本に生れた仕合はせさ」は「外に出て初めて判つた」（149頁）と語り、「私」はバリー人への認識を新たにしていく。『蘭印の印象』と共振する局面の多い一編である。

「厦門の遙拝式」（『オール読物』昭16・8）では、南洋航路で

蘭印から厦門を目指して航海する日本船が舞台である。「私」が、「船の中で、ささやかながら日支親善が見られることを喜んでゐた」（226頁）ところ、日本人のライター盗難事件が生じる。一時は疑心暗鬼になる「私」だが、ボーイの出来心ゆえの事件だったことが判明し、厦門沖では「支那人達も加はつて甲板の遥拝式」が「厳粛に行はれた」（230頁）ところで、小説は幕となる。

「厦門の遙拝式」の姉妹作にあたるのが、「南海」（『モダン日本』昭16・8）である。英領ボルネオのサンダカンへの寄港を楽しみとして、ジャバからの帰りに「特にS丸を選んだ」（18頁）という「私」だが、結局下船は許されなかった。「ジャバの邦人輸入商の店員」（19頁）である田鹿君は、船員になりすまして下船を遂げるが、街で船長に会ってしまう。なお、同地からは、内地へ帰る「ボルネオの邦人経営の缶詰工場の女工さん達」（20頁）や、後に「異郷で空しく倒れた人」（25頁）の骨壺と判明する箱を抱えた京藤さんが乗船する。帰国後、「私」が再会した田鹿君によれば、京藤さんは「特志看護婦に成つて大陸へ渡る」（26頁）らしく、田鹿君自身は来月ジャバに帰るのだという。京藤さん、京藤さんと田鹿君の関係に、「私」は「南海の暑熱」ゆえにか、「小説家的な空想」（25～26頁）を喚起されてもいた。

「南方の挿話」（『日本女性』昭16・10）も、「南海」同様、南洋に関する人事を聞くうちに、小説家の倉橋が物語の執筆意欲を喚起される作品である。ジャバS市のトコ・オオハタ（大畑商会）の番頭である間瀬君に連れられて、倉橋は江島老人のもとを訪れる。そこから、間瀬君が託されていた大畑氏の長男・健一と、かつてS市で商売敵であった江島の娘とを結婚させるという使命とその行方が、ジャバでのエピソードとともに書かれていく。

「日本の靴」（『現代』昭16・12）は、「日本で一番最初に製靴業に着手した人は誰か」（274頁）という一節から始まる。隅田川河畔の靴屋の銅像が気になっていた「私」は、蘭印で「跣足の方が普通の当り前のことに成つて、靴は何か特別の感じだつた」ことから、舶来の靴がいかに日本に広まったのか、「一番最初の靴屋さんといふのは、どういふ人だらうか」（276頁）と疑問を抱いた後、銅像のモデル・西村勝三の生涯を解き明かしていく。

「午後の庭」（『婦人朝日』昭16・10～12）は、姉・美與子と弟・舜次を軸に、恋愛や結婚の話題をちりばめた通俗小説だが、小説の終盤近くで舜次は仏印に赴任することになり、蘭印帰りの笹井が現地の状況を話す場面が展開される。そこでは、現地支那人の抗日意識が話題とされ、舜次は次のように考えていく。

ついせんだつてのことだが、支那に対する日本の指導的提携を願つてゐる或る支那人が、この日本人の不当な軽蔑を指摘して、この偏見が打破されないうちは、日支の政治的の提携は有り得ないと訴へてゐる文章を舜次は調査所で読んだ。これは、また支那人に対してもいはねばならぬことだつた。支那人の心の奥にひそんでゐる奇怪な自尊の偏見をも打破せねばならぬのだ。即ち日支間の相互の正しい理解がなくては、共存共栄の理想は実現されないのだ。（12月、53頁）

その舜次が、仏印に向かう船中で結婚を決意して小説は終わる。

以上、駆け足で『諸民族』収載の短編九作品をレビューしてきたが、これを一冊の書物として読めば、（現実世界の高見に関する情報とは別に）幼子を亡くした小説家が蘭印へ旅立ち、船中や

現地でのさまざまな体験を経て、植民地支配を受けている蘭印の現状をめぐる思索を軸に、日本（人）や諸外国、諸民族について考えめぐらせる、という理解が最大公約数として浮上する。

太平洋戦争開戦後に刊行された単行本について、広告「高見順著　諸民族」（『文芸』昭17・4）では次のように紹介された。

大東亜戦争の勃発前及び今次南方作戦に従軍してジヤバ、ボルネオ、マレイ、仏印等を抜渉せる作者が、現地各民族の生活感情に取材して描く九篇。何れも国境を超ゆる人間哀歓の真実と共に南国の妖しき花の香にみちたユニークな傑作集。（33頁）

この時、高見はすでに南洋各地を実際に目にした文学者であり、そのような作者が書く《人間哀歌》と《南国の妖しき花の香》（異国情緒）が前面に打ちだされている。書評も三点確認できた。

無署名「新刊巡礼　『諸民族』高見順著」（『三田文学』昭17・4）では、高見の旧作『故旧忘れ得べき』、『如何なる星の下に』にみられた《嘔吐を催すほどな嫌悪感など微塵もな》く、《明く、健康である》ことが確認され、次のように論評される。

たゞ、一寸いやな気持がするのはこの作者がバスへ乗らんとしたのでないかといふ嫌疑だけである。全篇、ジヤバやスマトラやその往復の船中に舞台が取られ、その点からも興味は尽きない。それらの舞台も今や日章旗の下にあり。全篇読み終り、大小の風俗事情を教へられて、ある大きな感動があつた。（127頁）

時局に阿（おもね）つた可能性を批判する評者だが、モチーフとされた地域が《日章旗の下》にあることは肯定的に捉え、各地の《大小の風俗事情》を学べることを本書の魅力と位置づけている。本多顯彰は「書評　小説五種」（『朝日新聞』昭17・4・22）で、《材を南方に取つたこの作品は読んで一番面白い》と評しつつも、《今となつては高見流の饒舌がまどろつこしく、苛立たしい》と、右の評と同様の見解を示す。ただし、そこには《十二月八日が、日本人に端的に、飾り気なく、しかし簡潔雄勁にものをいふことを教へた》という条件も関わる。『蘭印の印象』評などを想起しても、実際に高見が蘭印を旅したという事実（性）は、その文章の受容－評価に大きな効果を及ぼしたはずだが、本多が《作者が、どこへ行つても高見順とその周囲を持ち廻つてゐるのが、いさゝか鼻につき出した》（4面）と難じた点は、同時代の評価軸という観点からも、興味深い。井上立士は「高見順著　諸民族」（『新創作』昭17・5）を、次のように書きおこす。

遙か南の国として、私たちに考へられてゐた蘭印が、今日ではまことに身近なものになつて来た。近い将来にはそれらの島々の風景も人情も風俗も私たちとは切つても切れないものになるに違ひない。

同書の文学場での受容に際しては、右のような太平洋戦争開戦後における日本－南方関係が大きく関わる。事実、井上も《皇軍ジヤバへ敵前上陸といふ報を耳にしながら、この小説集を手にした欣びを多くの読者は共鳴して呉れるであらう》と言表する。また、井上は《著者特有の細緻な眼と豊かな感受性と、有機的な理解力とが、この度の印象を単なる紀行に終らせずに、私たちに遥かな南国の風物や人情を教へるだけではなく、私たちがそれらから何を考へるべきか、何を発見すべきかを暗示してゐる》と二重

化された『諸民族』の意義を説き、次のようにつづける。

白人の領有下に幾つかの世代を経たいはば被圧迫民族であるこの島々の人々、又彼等の上に君臨してゐる白人たち、その間に伍して、祖国を遠く離れて活躍してゐる私たちの同胞の男女、明るい赤道の太陽の下に繰りひろげられてゐるもろもろの民族の交流がかもし出す興味ある世界を、私たちの無関心なるを得ないまでに巧みに把握して、今日では私たちの身近な問題となつてゐる、さらに明日はいつそう眼をそむけては居られないであらうものを、如何に私たちが思考すべきか——といふ切実なテーゼを提出して、その方法に示唆を与へてゐる所にこの短篇の高い価値と、高見氏の聡明さを見るべきだと思ふ。（44頁）

結果的にせよ、太平洋戦争開戦後にこのように読まれた『諸民族』とは、小説であると同時に文化工作（の実践）でもあった。

Ⅳ

本稿Ⅱ・Ⅲで検討した『蘭印の印象』、『諸民族』とその同時代受容は、必ずしも時局迎合の符牒ではない。高見が蘭印への旅を望み、『蘭印の印象』、『諸民族』をそのようなものとして書いたことは、同時代の歴史－言説と無縁ではないのだから。それでも、高見が短編－単行本の表題に掲げた「諸民族」が、太平洋戦争開戦後、明確に大東亜共栄圏内の南方諸民族を指示する言葉と化していったことは、次に引く原田禎正「大東亜共栄圏の諸民族を語る」（『逓信協会雑誌』昭17・2）に明らかである。

多年東亜の天地に跋扈した米英の覇権が地に堕ち、その諸民族が久しい桎梏から脱し、長年の塗炭の苦を免れて、我が国の指導下に新しい東亜の進軍を開始する日も遠からぬことである。泰、比律賓、馬来、仏印、蘭印等の諸民族がこの大東亜共栄圏内の一員として将来如何なる発展過程を辿るべきかは、まことに興味ある問題である。（55頁）

自らの蘭印体験をモチーフとして『蘭印の印象』、『諸民族』を書くという高見の文学者としての営為は、時局迎合／便乗以前に、現実世界－言説双方において歴史的なものでもあった。

蘭印から帰国して半年もたたぬうち、高見は徴用によって再び南方・ビルマへと向かう。このプロジェクトでは、文学者は当初から文化工作要員として徴用されていた[9]。丹羽文雄は「文芸時評①三つの記録」（『都新聞』昭17・3・11）において、《今月になつて待望の軍報道部員の手記が、方々の雑誌に登場した》ことを特筆し、《いづれ時間がおくれて発表される手記である以上は、新聞やラジオからうける感激感動を一応ねぢ伏せて、時間を超越して、私たちの胸にとびこんで来る激越なものを期待した》と言明し、《もつとも私を喜ばせた》ものとして、堺誠一郎「マレー西岸部隊」（『中央公論』昭17・2）をあげた。その後、《「ビルマ遊撃記」（改造）高見順君、「南国の月」（文学界）寺崎浩君のもの》に論及する丹羽は、《書かれた文字にとけ入る前に、それぞれの作者のもつ馴染ぶかい風格が邪魔をした》と両作を否定的に捉え、《如才のない、抜目のない高見順君の身振り顔つきが彷彿として戦傷の生ま生ましさが生気を失つた》、《高見君は天凜の才能の使ひどころに戸惑つてゐるのではないか》（6面）と評され

た。右に丹羽が論及したのは、正確には高見「ヴィクトリアポイント見聞記――ジャングル踏破の松井部隊を訪ねて」（『改造』昭17・3）だと思われる。同文には、日比野士朗も「報道と文学文芸時評」（『文芸』昭17・4）で次のように論及した。

正直に言つて、平素の氏の才筆に馴れた目でこれを読むと、些か生彩に欠き、読者もまごつくが、高見氏自身も途惑ひしてゐることがわかる。〔略〕もう少し長い目で見れば、自然と新しい高見文学が私たちの前に展開されるにちがひない。

それが楽しみである。（82頁）

してみれば、蘭印を経験した高見ではあるが、ビルマでの見聞・体験を、まだ文学者として血肉化できていないと映じていたということだろう。丹羽や日比野には、そのような作家主体とモチーフとの間隙が、高見の戸惑いにみえていたのだ。逆にいえば、この課題がクリアされれば、日比野の期待通り《新しい高見文学》が登場することになるはずだ。事実、高見はビルマからの帰還後少し時間がたってから発表した小説「帰つての独白」（『改造』昭18・3）、「ノーカナのこと」（『日本評論』昭18・6）によって、次第にその評価を好転させていくことに成功する。

注

（1）小野芙紗子編「年譜」（『高見順全集　別巻』勁草書房、昭52）、686～687頁。

（2）梅本宣之「高見順における南方行の意味」（『高見順研究』和泉書院、平14）、木村一信「高見順〈南洋行〉序説」（『昭和作家の〈南洋行〉』世界思想社、平16）、木村一信「高見順「ある晴れた日に」論――バリ島体験の意味」（同前）、平野謙ほか編『現代日本文学論争史　下巻』（未来社、昭32）ほか参照。

（3）河田和子「高見順の南方行と《文学非力説》」（『比較社会文化研究』平10・2）、13頁。

（4）後藤乾一「海軍南進論と「インドネシア問題」」（『昭和期日本とインドネシア』勁草書房、昭61）、27頁。

（5）単行本収録の際、引用箇所の「土民」は「住民たち」に、「白人」は「欧洲人」に改められる。

（6）単行本収録の際、引用箇所の「土民」は「彼等」に、「白人」は「欧洲人」に改められる。

（7）高見「文学非力説」の同時代受容に関しては、拙論「同時代のなかの「文学非力説」論議」（『国語国文』平30・10）参照。

（8）拙論「従軍ペン部隊言説と尾崎士郎「ある従軍部隊」――文学（者）の役割」（『日中戦争開戦後の文学場　報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、平30）参照。

（9）この時期の文学場に関しては、拙論「マレー・シンガポール攻略作戦をめぐる報道文」（『太平洋戦争開戦後の文学場　思想戦／社会性／大東亜共栄圏』神奈川大学出版会、令2）参照。

（10）拙論「帰還する南方徴用作家・序説――尾崎士郎「朝暮兵」・火野葦平「敵将軍」」（『人文学研究所報』令2・9）参照。

※本研究はJSPS科研費JP20K00323の助成を受けたものです。

（まつもと　かつや　神奈川大学国際日本学部教授）